

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320054

研究課題名（和文） 境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学

研究課題名（英文） The Disappearance and Reconstruction of Borders in European and Anglo-American Literature from the Late 19th Century to the Early 20th Century

研究代表者

西川 智之（NISHIKAWA TOMOYUKI）

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：20218134

研究成果の概要（和文）：

19世紀後半から20世紀前半の欧米の文化・芸術を、「境界の消失と再生」という観点から、考察してきた。

「ユダヤ性」というテーマでは、三つの異なったアプローチからの研究で、世紀転換期のユダヤ人が置かれていた複雑な状況を浮き彫りにした。「ジェンダー」というテーマでは、男性作家におけるジェンダーを独自の観点から問題にすることで、当時の欧米文学に内在する一側面に光を当てた。また「諸芸術」のテーマでは、異なった芸術領域における芸術運動を多面的に扱うことで、芸術の解体と新しい芸術の生成について、具体的に提示することができた。

研究成果の概要（英文）：

Our research project investigated the culture and art in Europe and America from the late 19th to the early 20th century from the viewpoint of "the disappearance and reconstruction of borders."

Three members of this project dealt with the theme "Jewishness", and two members explored and revealed the issue of "gender" in two male writers, Hemingway and Hardy. The other four analyzed art movements at the turn of the 19th into the 20 century through multiple viewpoints.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2009年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
総計	8,500,000	2,550,000	11,050,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：英米文学、独文学、仏文学、総合芸術、ジェンダー、ユダヤ性、モダニズム

## 1. 研究開始当初の背景

この時代の文学、文化、芸術の分析はかなり進んでいるが、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリアなど地域が限定されている場合がほとんどで、また問題の取り上げ方も

本研究のような多角的な視点からはあまり行われていなかった。自分たちの属する研究機関の特色を生かし、研究地域あるいは研究分野の異なる研究者が結集して欧米のひとつの時代に焦点を絞り、研究の総合的な体系

化を目指すという点にこそ、本研究の意義があった。

## 2. 研究の目的

本研究は、19世紀後半から20世紀前半の欧米の文化・芸術を、「境界の消失と再生」という観点から、文学作品を中心に分析し、19世紀後半から20世紀初頭の欧米社会が、近代から現代へと変貌していくその姿を浮き彫りにしようとしたものである。

研究で扱う地域は主に、ドイツ語圏、イギリス、アメリカ、フランスであり、また研究のテーマも「ユダヤ性」、「ジェンダー」、「諸芸術」と様々であるが、世紀転換期を中心に現れた様々な変革の動きについて分析し、その共通点を明らかにすることで、欧米社会の近代から現代への転換の特質を明らかにしようとしたものである。

## 3. 研究の方法

19世紀後半から20世紀初頭のこうした様々な問題のうち、産業化に伴う社会の変化を象徴する問題として「ユダヤ性」を取り上げ、社会の構成要素として家族あるいは「男性—女性」の境界線のゆらぎを、また19世紀の中流階級が享受していた文化の境界線の変動として、芸術誌や舞踊・音楽を中心に当時の文化・芸術の革新運動を扱い、近代から現代への転換点にあったヨーロッパの姿を明らかにすることを目指した。

本研究には以下の9名の研究者が参加しており、それぞれが以下の大きな三つのテーマのひとつを分担して研究にあたった。

### 1) 越智和弘、田所光男、長畑明利

民族の境界の消失と再生—ユダヤ人文学を例として

### 2) 上原早苗、谷本（松下）千雅子

「男性—女性」の境界の消失と再生—イギリス文学・アメリカ文学を中心に

### 3) 西川智之、山口庸子、古田香織、藤井たぎる

芸術の境界の消失と総合芸術—音楽、美術、舞踊、芸術誌を例として

この時代の文学、文化、芸術の分析はかなり進んでいるが、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリアなど地域が限定されている場合がほとんどで、また問題の取り上げ方も本研究のような多角的な視点からは行われてこなかった。研究地域あるいは研究分野の異なる研究者が結集し、欧米のひとつの時代に焦点を絞り、研究を総合化することで、19世紀後半から20世紀初頭の欧米社会が、近代から現代へと変貌していくその姿を浮き彫りにしようと考えた。

## 4. 研究成果

本研究は、産業化に伴う19世紀後半からのヨーロッパ社会の変化を研究対象としてきた。ユダヤ人のゲットーからの解放は、逆にユダヤ文化の消失でもあった。また近代的な家族観が確立される一方で、ゾラやシュニッツラーらの小説はそうした家族観がいかに偽りに満ちたものなのかを暴露している。また、絵画、彫刻、音楽、建築、舞踊などの諸芸術を一つの総合芸術作品に作り上げようとする運動があった一方で、それとは対照的に、絵画や音楽、文学の分野では、色彩そのものを、音階そのものをあるいは意識の流れそのものを表現しようとする動きもあった。本研究は19世紀後半から20世紀初頭にかけての欧米文化・欧米社会のそうした多様な動きを「境界の消失と再生」という観点から検討してきた。

研究期間の初年度に当たる平成20年度には基礎資料・基礎文献の収集に力を入れながら、各自が研究を進めるとともに、われわれの研究対象よりも前の時代にあたる、市民文化の台頭についての知識を補完するために、立命館大学より宮本直美氏を招き、「交響曲—普遍的共同体とドイツ」というタイトルで、18世紀前半の市民階級の台頭について話をうかがうとともに、同じ日に、本研究に参加している西川、長畑、山口の三名も「欧米の市民文化の諸相」というタイトルでシンポジウムを行った。われわれの研究は、市民文化が最盛期を経て様々な要因により解体していく時期を研究対象としているが、宮本氏の講演やシンポジウムで、その市民文化の台頭期からの時代的な流れをつかむことができ、平成21年度以降の研究につなげることができた。

平成21年度8月には、藤井がオーストリアザルツブルクのモーツァルテウム大学などで調性和声や近代オペラについての資料収集を行い、西川が宮城県美術館で美術雑誌 *Ver Sacrum* の一部を写真撮影しDVD化した。それらの資料収集で得られた資料は、以降の我々の研究に非常に有益なものとなった。また、平成22年3月には、アメリカからスーザン・マニング氏を招き、われわれの研究している19世紀後半から20世紀初頭にかけての欧米の文化・芸術が、その後どのように受け継がれ発展していったのかについて、「大西洋を越えたドイツ表現舞踊」のタイトルで講演をしていただいた。ドイツ表現舞踊がアフリカ系アメリカ人舞踊家へ与えた影響など、国境や文化圏を超えた戦間期の文化交流は、アメ

リカ、イギリス、フランス、ドイツ語圏などを研究の対象としている我々の研究を広い視点から捉えるための大きな示唆を与えてくれた。

このように平成 20 年度、21 年度には、講演会などを通じて、本研究の研究対象である時代よりも前の時代や後の時代の欧米文化のつながり・流れの認識を深めるとともに、各自が分析対象・問題を絞った研究を進めていったが、平成 22 年度には、10 月から 12 月にかけて連続シンポジウムを行い、自分たちの研究成果の一部を発表し、外部の方々からの指摘を仰ぐことで、自分たちの研究に問題点がないかなどを検証した。

その平成 22 年度の連続シンポジウムでは、オープニングとして、カナダからサッシャ・コルビー氏を招き、10 月 29 日にセミナーを、11 月 1 日にはパフォーマンスと講演会を開催した。また、11 月 3 日には、コメンテーターとして西村雅樹氏を招き、シンポジウム「世紀転換期ドイツ、オーストリアの芸術運動」を行った。そしてこの連続シンポジウムのしめくりとして、12 月 4 日・5 日には、アメリカからマイケル・シェリー氏を招き、愛知県立芸術大学との共催で「境界の消失—20 世紀前半の芸術の諸相」というタイトルでシンポジウムおよびワークショップを行った。コルビー氏には H.D. を題材にしたモノローグ（一人芝居）も上演していただき、またシェリー氏は演奏を交え、また聴衆とやりとりをしながらの講演で、どちらもわれわれの研究テーマである「境界の消失と再生」のまさに実践例としても非常に刺激的であった。

最終年度となる平成 23 年度には、各自研究の深化・とりまとめを進め、研究成果の一部を論文集として刊行した。

以下、本研究の研究テーマごとに、最終的な研究成果を要約する。

#### ① 民族の境界の消失と再生

それぞれが世紀転換期の欧米文化の多様な側面に光を当てながら、「ユダヤ性」について異なった観点からの考察を試みた。

越智は、19 世紀末から 20 世紀前半期にかけて激しく現れたドイツにおけるユダヤ人憎悪の源泉を系統発生的な要因に見いだしたフロイトの説を元に、ドイツの近代文化史を、キリスト教への反感と忠実な帰依という矛盾のなかから解明した。

フランス南部のアヴィニオン周辺には「教皇のユダヤ人」と呼ばれたユダヤ人社会が存在し、19 世紀を通じて同化が進められたが、田所はそこを直接訪れ調査を行った体験を踏まえながら、このグループに自らのユダヤ人アイデンティティの基礎を置こうとした

アルマン・リュネルの試みを中心にして、ユダヤ人と非ユダヤ人を画する境界の変容の問題を考察した。

そして長畑は、詩人ミナ・ロイの生涯をたどり、詩人の人生における地理的な越境を彼女が創作した詩と関連付けながら分析することで、20 世紀前半期のユダヤ人芸術家のおかれた状況を浮き彫りにした。

越智の研究は、非ユダヤの観点からのユダヤ人憎悪の原因を探るものであり、また田所と長畑はユダヤ系の作家を扱ったものであるが、一方はその同化の試みを、もう一方は彷徨を繰り返した詩人を論じたものであり、それぞれの全く異なったアプローチからは、ユダヤ人が置かれていた複雑な状況が浮き彫りにされてくる。

#### ② 「男性—女性」の境界の消失と再生

松下（谷本）は、マッチョ的な作家と評されることの多いヘミングウェイについて、その短編「世の光」の解釈を例に、ジェンダーの観点からの新しい批評のありかたを提案した。

上原はハーディの自筆原稿を解説しながら、エクリチュールとジェンダーの越境の関係について考察した。例えば『ラッパ隊長』では、〈男性ジェンダー化されたプロット〉（ジョンによるアン救出）と〈女性ジェンダー化されたプロット〉（アンによるロバート救出）が合わせ鏡のように呼応しているが、この二つのプロットの類縁性は最初からあったわけではなく、改変の所産としてあることが原稿解説を通して明らかになった。推敲段階で、すでに書かれていた〈男性ジェンダー化されたプロット〉に触発された形で〈女性ジェンダー化されたプロット〉が新たに加筆されたこと、言い換えれば、ジェンダーの逆動作用があったことを確認した。

両名とも、あえて男性作家におけるジェンダーを独自の観点から問題にすることで、当時の欧米文学の一側面に光を当てている。

#### ③ 芸術の境界の消失と総合芸術

山口は「輪舞」という一舞踊形態が、諸芸術やパフォーマンスの境界を越えてどのような意味を与えられていったのかを探ることで、当時の市民文化の複雑な身体意識の解明を試みた。

西川はウィーン分離派のベーターヴェン展のカタログとクリンガーの『絵画と素描』の比較を通して、そこに表明された「総合芸術観」の微妙な相違を指摘した。また、古田は創刊年の雑誌「ユーゲント」を一つのコラージュと捉え、そこに取り入れられた多様な素材がどのように組み合わせられて「ユーゲント」という総合芸術誌を作り上げていたかを具体的に分析した。

また、藤井は「芸術と非-芸術のあいだの境界の消失と再生」という観点から、デュシャンやケージを例に、20世紀初頭の先鋭な芸術運動についての分析を試みた。

このように、舞踊、美術、文学、音楽などの異なった芸術領域における芸術運動を多面的に扱うことで、芸術の解体と新しい芸術、芸術観の生成について、具体的に提示することができた。

上述してきたように、本研究では世紀転換期の欧米の文化・芸術の多様な姿を浮き彫りにすることができた。しかし、他方それを統一的な形にまとめきれなかったことも事実であり、それはわれわれの今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17 件)

西川智之「総合芸術作品としてのベートーヴェン展—展覧会カタログと『絵画と素描』の比較を中心に—」(科学研究費補助金研究成果報告書『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学—』、査読なし、2012年、107-125頁)

古田香織「視覚のコラージュ『ユーゲント』(“die JUGEND”)における様々な融合」(科学研究費補助金研究成果報告書『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学—』、査読なし、2012年、147-166頁)

長畑明利「ミナ・ロイの越境と修辞—初期詩篇を読む」(科学研究費補助金研究成果報告書『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学—』、査読なし、2012年、43-65頁)

田所光男「消滅した〈教皇のユダヤ人〉—アルマン・リュネルのユダヤ意識の基層—」(科学研究費補助金研究成果報告書『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学—』、査読なし、2012年、31-42頁)

越智和弘「去勢恐怖とユダヤ人憎悪—フロイトの超自我をめぐる系統発生的文化論—」(科学研究費補助金研究成果報告書『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学—』、査読なし、2012年、9-30頁)

松下(谷本)千雅子「ポスト・アウティング批評—ヘミングウェイ「世の光」を例に—」(科学研究費補助金研究成果報告書『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の

欧米文学—』、査読なし、2012年、169-177頁)

山口庸子「『根源』としての輪舞—西欧市民社会への対抗表象」(科学研究費補助金研究成果報告書『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学—』、査読なし、2012年、71-87頁)

藤井たぎる「Tonality as “the object-cause of desire”」(『The Originality and the Fake in Arts: Lectures at Butler University (USA) November 2011』、査読なし、2012年、17-24頁)

古田香織「『ユーゲント』—“Der Neue Stil”をめぐる—」(『名古屋大学大学院国際言語文化研究科言語文化論集』、査読なし、第32巻第2号、2011年、129-147頁)

上原早苗「Deception and Desire: Hardy’s Revisions to *The Mayor of Casterbridge*」(Hardy Review 13 (2)、査読有、2011年、158-167頁)

西川智之「ゲーテの『親和力』」(『名古屋大学大学院国際言語文化研究科言語文化論集』、査読なし、第33巻第1号、2011年、111-124頁)

松下(谷本)千雅子。「スキャンダルはいつもスキャンダラス?—「ボクサー」と「最後の良き故郷」の近親姦クローゼット」(『ヘミングウェイ研究』第11号、査読あり、2011年、37-47頁)

上原早苗「トマス・ハーディの本文改変を読む」(『文学 特集=草稿の時代』岩波書店、査読なし、2010年11月号、203-217頁)

山口庸子「表現舞踊と精神医学—メアリー・ヴィグマンとハンス・プリンツホルン」(『日本病跡学会雑誌』11号、査読あり、2010年、62-69頁)

山口庸子: Brief als Medium der Transformation. Else Lasker-Schülers „Briefe nach Norwegen“. (In: Yamamoto, Hiroshi/Ivanovic Christine (Hrsg.): Übersetzung – Transformation. Umformungsprozesse in/von Texten, Medien, Kulturen. (Königshausen & Neumann)、査読あり、2010年、S. 180-187.)

長畑明利「Pound’s Reception of Noh Reconsidered: The Image and the Voice」(Ezra Pound, Language and Persona

(Quaderni di Palazzo Serra) 15号、査読あり、2009年、p.113-125.)

松下(谷本)千雅子「「アフリカ」は何処にあるのか—『エデンの園』におけるアフリカ物語と「部族的なこと」」(『ヘミングウェイ研究』第9号、査読あり、2008年、15-27頁)

[学会発表] (計15件)

長畑明利「Rereading Wallace Stevens in the 1930s」(Revisiting the 1930s in American Literature and Culture、2012年3月11日、於：名古屋大学)

田所光男「比較マイノリティ学の方法論—三つのマルチニック小説を題材に—」(日本比較文学会中部支部第32回中部大会、2011年11月26日、於：名古屋大学)

藤井たぎる「Tonality as “the object-cause of desire”」(Fire of desire: An “East meets West” symposium of lectures, concerts, seminars and presentations、2011年11月14日、於：Indiana University Bloomington)

藤井たぎる「Genuine and fake in arts」(Fire of desire: An “East meets West” symposium of lectures, concerts, seminars and presentations、2011年11月11日、於：Butler University)

松下(谷本)千雅子「セクシュアリティと物語の快楽」(日本英文学会中部支部第63回大会シンポジウム「語りの<新しい>可能性」、2011年10月30日、於：名古屋大学)

長畑明利「Tender Buttons as Poetry of Mock-Explanation」(Dialog on Poetry and Poetics: The 1st Convention of Chinese/American Association for Poetry and Poetics、2011年9月30日、於：華中師範大学)

長畑明利「Revisiting the Fenollosa Manuscripts in The Japan Times: Pound’s Language of Nostalgia and the International Affairs」(The 24th International Ezra Pound Conference、2011年7月7日、於：University of London)

上原早苗「The Profitable Reading of Fiction: Hardy’s Extended Creative Process and the Case of Susan and Tess」(Thomas Hardy Association, U. S. A. Hardy at Yale II、2011年6月9日、於：Yale University)

藤井たぎる「20世紀芸術における<境界>」(境界の消失と再生：現代音楽の諸相～シンポジウム・トークコンサート・ワークショップ、2010年12月4日、於：愛知県立芸術大学)

西川智之「総合芸術観とベートーヴェン崇拜」(シンポジウム 世紀転換期ドイツ、オーストリアの芸術運動、2010年11月3日、於：名古屋大学)

古田香織「『ユーゲント』における „der Neue Stil “をめぐって」(シンポジウム 世紀転換期ドイツ、オーストリアの芸術運動、2010年11月3日、於：名古屋大学)

松下(谷本)千雅子「The Elephant in the Garden: The Hunting Story and ‘Tribal Things’ in *The Garden of Eden*」(Hemingway’s Extreme Geographies, 14th Biennial Hemingway Society Conference、2010年7月27日、於：University of Lausanne, Switzerland)

松下(谷本)千雅子「What Could Be So Queer?: Psychoanalyzing Narrative Pleasure」(Technology of Pleasure International Conference、2009年11月21日、於：名古屋大学)

越智和弘「戦後ドイツ文学はなぜ性を語ら(れ)なかったのか」(日本独文学会秋期研究発表会、2009年10月18日、於：名古屋市立大学)

田所光男「覆い隠された恐怖—アラブ系ユダヤ人に課された共生神話—」(シンポジウム『恐怖からの思考—現代世界を解明する—』、2008年9月30日、於：名古屋大学)

[図書] (計6件)

西川智之他 科学研究費補助金研究成果報告書『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学—』(名古屋大学国際言語文化研究科発行)、2012年、200頁

上原早苗他 How May We Interpret Tess’s Story? GCOE Program International Conference Series No. 11: Between Philology and Hermeneutics (名古屋大学発行)、2011年、89頁

上原早苗『イギリス文学のランドマーク』(大阪教育図書)、2011年、364頁

松下(谷本)千雅子『クィア物語論—近代ア

メロカ小説のクローゼット分析』(人文書院)、  
2009年、260頁

Tanimoto, Chikako. "An Elephant in the Garden: Hemingway's Africa in *The Garden of Eden* Manuscript." *Hemingway and Africa*. Ed. Miriam B. Mandel. New York: Camden House, 2011. 199-211.

Matsushita, Chikako. "What Could Be So Queer?: Psychoanalyzing Narrative Pleasure." *The Technology of Pleasure*. Eds. Chikako Matsushita, Edward Haig, and Yasushi Sugimura. Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University, 2010. 38-42.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西川 智之 (NISHIKAWA TOMOYUKI)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授  
研究者番号: 20218134

### (2) 研究分担者

越智和弘 (OCHI KAZUHIRO)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授  
研究者番号: 60121381

田所光男 (TADOKORO MITSUO)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授  
研究者番号: 40179734

長畑明利 (NAGAHATA AKITOSHI)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授  
研究者番号: 90208041

藤井たぎる (FUJII TAGIRU)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授  
研究者番号: 00165333

上原早苗 (UEHARA SANAE)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授  
研究者番号: 00256025

谷本千雅子 (CHIKAKO TANIMOTO)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授  
研究者番号: 90273200

山口庸子 (YAMAGUCHI YOKO)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授  
研究者番号: 00273201

古田香織 (FURUTA KAORI)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授  
研究者番号: 20242795

(3) 連携研究者  
なし